

3-5 第二次世界大戦中の機密図誌（海図・航空図）(1)

坂戸直輝（元海上保安庁水路部）

[編集者のまえがき]

以下は坂戸直輝氏の第4回研究会における発表の記録である。2003年11月9日の発表のあと、坂戸氏にはこのニューズレターに掲載する原稿の執筆をお願いしていた。しかし同氏は、以後怪我のため玉川病院に入院され、執筆が困難になった。このため急きょ講演記録のかたちで原稿を準備することにし、録音テープを学生アルバイトによって書き起こし、これを今井健三氏（日本水路協会）に訂正していただいた。これをもとに小林がさらに見出しなどをくわえ、さらに坂戸氏・今井氏にご覧いただき、掲載することとした。なお、坂戸氏は玉川病院退院後は自宅で療養されているところである。

発表に際して坂戸氏は、A4版全3枚の要旨にくわえ、A4版2枚の『日本水路史』海上保安庁水路部、1971年、224-227、300頁）からの抜粋、A3版1枚の水路部の地図、さらにA3版14枚+A4版1枚の『普通水路圖誌目録』・『急速覆版海圖目録』・『秘密水路圖誌目録』・『秘密航空圖誌目録』からの抜粋からなる資料を配付されたほか、各種の海図・航空図の実物も今井健三氏・上林孝史氏（海上保安庁海洋情報部）の協力を得てご持参くださった。

またこの発表では、当初の予定の内容の半分をカバーしているにすぎず、再度

坂戸氏のご発表を期待している。

はじめに

私、先ほどご紹介に預かりました坂戸直輝です。戦前から戦中戦後、水路部にずっとおりまして、文官だったために海上保安庁に水路部が移行して以後も勤務をつづけ、定年（1977年）までおりました。最後の7年間は、海上保安学校（舞鶴）の水路教官室、室長を3年やって、それから第九管区（新潟）の水路部長を4年やりまして退官しました。それから（財）日本水路協会に7年おりまして、現在の会社（国土地図株式会社）では、やはり海の方の仕事をずっとやっておりました。

いろいろ、その間に見聞きしていること、あるいは私が勉強したことを体験的にお話したほうがいいと思っております。今までそういう話を私は何回か講演したことがあります¹⁾が、秘密図誌の話をするのは初めてです。いろんな資料がありますので、まず資料の確認から行います。

水路部の位置

最初のほうは、私が説明する要旨（A4版全3枚）ですが、つぎの大きい図面（図1）が水路部を示す地図です。こういう形

のときに戦災を受けたわけです。北にみえる千代橋は今の魚河岸(中央卸売市場)の通りでこのままです。築地病院と書いてあるのは、現在は国立がんセンターです。河川と書いてあるのは、高速道路になっています。

ここで大事なのは、この右下のところに経緯度基点標とあることです。これは魚河岸の正面入口のロータリーのところにあたります。道路交差点の中央にあったんです。それで、今は朝日新聞社の敷地になっていますが、そこにこの経緯度基点標という銘板がありました。つまり地理的位置に間違いなくあったわけです。

最初に海軍の観象台から天文台に移って、それから経緯度は東京天文台の測定値を用いていましたが、大正4年~6年水路部天測室で精測をおこない、従前の経度に10秒余の誤差があることを発見しました。その天測室の元の位置がここだということです。それがなんらかの拍子で壊されちゃったんです。この経緯度基点の銘板だけでも今の朝日新聞社のところにあればいいのだけでも、現在は水路部の中の業務資料館にあります。これは是非今日来ておられる方だけでも知っていただかなければと思って、この図をつかって説明いたしました。

図誌目録

その次が図誌目録です。まずはじめは、『普通水路圖誌目録』(水路部、昭和19年5月刊)の表紙と中表紙のコピーです。その次に、どういう区域の図をインデックスではどう配列しているかという、索

引図の一覧表があります。

この図誌目録はちょっと面白い。終戦直前に作ったもので、合冊になってるんです。それで、普通の人だと分からないんですけど、一冊の中に「急速覆版海圖目録」(急速覆版海圖については後述)という目録があるんです。その目録が大事なんですが、世界中の海図を出してるわけです。急速覆版海圖というのは全部写真版です。だいたい1,960版ぐらいあります。ここにどういう区域の海図を出していたかということが書いてあります。その次にその区域はどうだったか。索引圖第1をご覧になると、遠くアメリカの方まで出していたということが、お分かりになっていただけるんじゃないかと思えます。

秘密水路圖誌目録

さらに次の資料が大事です。特別に持って来たもので、実物です。『秘密水路圖誌目録』(水路部、昭和19年5月刊)といます。要旨にどういう分類になってるか詳しく書いてきました。その全部をコピーする訳にいかないの、「軍機海圖、軍極秘海圖及秘海圖番号索引」という部分、つまりどのような海域の図が出ているかという目次と索引図の一覧表をコピーしました。どういうところの海図が出ているかお分かりになると思います。

それから、その目次に対する索引図のコピーをとりました。索引図は、ご面倒でも右左を貼っていただくと、全貌が分かると思います。これは日本からずいぶん遠いところまで出していたことがお分

かりになると思います。この種の海図は
だいたい 500 版出ていました。あとでそ
の話をしていただきます。

秘密航空圖誌目録

それから航空図です。秘密の航空図は
たくさん出していました。これこそ海軍
の航空隊のためにはなくてはならない図
です。この目録には、目次があるんです
けど、どういう地域の航空図があるか
ということを書いていません。そのため、
索引図の目次がなく、「機密航空圖索引
圖」という、索引図そのものをここに持
ってきました。配付資料にコピーがある
「機密航空圖索引圖第 1」というのは、
日本の割合に近くを示していますが、こ
れからはるか遠くの地域までの航空図が
あります。

秘密の海図、航空図のサンプル

次の機会には、どのようにこれらの図
を編集したか、詳しいことをご説明する
として、今日は航空図というのはどうい
うものか、秘密の海図というのはどうい
うものかという、サンプルを持ってきま
した。いずれにしても図の周囲に赤い帯
が入っているから普通の海図との区別が
わかるということと、番号が一枚一枚ナン
バリングしてあり、それをもとにどの
図がどの配布先にいつてるか、というこ
とが記録できるようになっています。

図と図誌

それから一番はじめにお断りしなけ
ればならなかったのですが、昭和 19 年当
時の水路図誌、航空図誌の話に関連して、
用語の解説をしておきたいと存じます。

「図誌」というのは、さきほど兵要地誌
のお話を源先生がされたように、海図と
の関係で大きな意義をもつ水路誌なの
ですね。図と誌は表裏一体で、セーフティ
ナビゲーションというか安全な航海のた
めには、水路誌にはなくてはならない内
容の説明が書いてあるわけです。日本は
もちろん、外国地域なんかものすごく詳
しい水路誌がずーっと出てるんですね。

水路誌はだいたい 60 冊ぐらいあるの
ですが、その辺がどういう風になってい
るかということ参考に後から申し上げます。
それからもう一つは、海図、水路
誌の宿命として、生まれたら必ず現状を
反映しつづけねばならない。海図は昔か
ら x 、 y 、 z と時間の 4 次元の仕事を、4
次元でいくというような生命を持ってい
ます。ですから測量するときも、いつの
測量、いつの水深というのをみんな記録
しておきます。あとで水深はその時の潮
汐の潮位記録から換算して決めます。

海図ができたあとは、水路通報という
もので水路の現状を通報するということ
を非常に詳しくやっています。一週間に
一回、水路通報を出します。あとでまた
詳しくご説明しますが、敗戦処理の
ところに GHQ の命令で水路通報を 200 冊
提出するようにということが出てきます。
海図と水路誌と水路通報の三つで、水路
に関する情報を利用者に伝えます。これ
は今の電子海図になっても変わらないん
じゃないかと思います。

水路部の名称

資料の説明は以上でおわり、本題に入ります。まず水路部の名称の変遷というのは、要旨の2枚目に書いてあります。水路部はずっと水路部という名称できていたのですが、水路寮という名称の時代もありました。海軍水路部というのも2年ばかり使ったことがあります。結局、いわゆる艦船だけの、軍隊だけの海図を作っているんじゃないということで、海軍という言葉を取って、ずーっと終戦まで水路部という名前でした。終戦後海上保安庁に入ったことがあって、それで水路局、それから水路部になりました。でも、残念なことに平成14年に海上保安庁海洋情報部と改称されました。こういう普通名詞的なことがいいのかどうかわかりませんが、私自身は長くいたので固有名詞の水路部が懐かしいと思います。ここでは古い話をするので水路部ということになります。

水路部の組織

それから、要旨2番目の水路部の部制組織というところにうつります。これは、戦争突入で相当大きくなった時代の組織のことを書いてあります。当時、第一課、第二課という名称を用いており、参謀本部の陸地測量部も第一課、第二課というようなことで、名前だけでは業務内容がわからないので、ここに書いておきます。第一部第一課では、海図や航空図の編集を全部やっていたわけですから、

第一部の第二課で製版印刷をやっていました。第二部（第三課～第五課）は観測の方です。それから、第三部の第六課・第七課はあとで海軍気象部に移行します。それが水路部の中であって、随分人数が多かったのです。しかし終戦の直前には海軍気象部ができ、ちょっと人数が少なくなりました。

それからもうひとつ戦時下の部制組織としては、上海海軍航路部が昭和15年12月にできました。これは揚子江の測量をやるためです。中華民国の海道測量局というのはなかなかいいチャートを作っており、その成果は素晴らしいものでした。国際交換でどんどん来るわけです。みんな漢文で書いてあります。地名等縦書きで、向こうのちゃんとした写植式の活字で素晴らしいものでした。それがいつの間にかなくなってしまった。つまり終戦のどさくさの処理です。外国の大事な資料として、存置しておけば良かったと思います。日本の管轄の上海海軍航路部になったら中華民国で作ったそういう海図は見られなくなりました。当時の旧版の何枚か写真版が水路部にあると思います。揚子江の近所の部分です。今はそういうのを見るよりしかたがありません。

それから、もうひとつ南方海軍航路部というのがスラバヤにあり、昭和18年に測量部隊が行きました。ここでは海図も作っていたし、測量・水路探索、さらに海象観測もやっていたけれども、戦争が危なくなると昭和20年の1月、撤退しました。上海海軍航路部の方は、昭和15年12月にできて、そこで終戦を迎えたわけですから、

水路図誌の細目

要旨の次のページでは水路図誌、航空図誌の細目にふれています。これは、昭和10年に、海軍大臣名で決めたものです。水路図誌には大きく分けると、まず秘密水路圖誌があります。それから普通水路圖誌です。秘密水路圖誌にでているものは秘密で、その細目はどれを見ても「機密」という言葉がついています。

秘密水路圖誌のなかに、小分類としてまず(イ)機密海圖と(ロ)機密水路書誌があります。ついで(ハ)機密二属ス假製ノ水路関係圖誌、さらに(ニ)機密告示となります。告示というのは、通報のことです。

それから普通に出版されていた海図に関連する普通水路圖誌となります。(イ)普通海圖、(ロ)普通水路書誌、(ハ)機密二属セザル假製ノ水路関係圖誌とありますが、ここでひとつ取り上げたいのは(ニ)雑用海圖です。これはもう、みなさん年輩の方には懐かしい思い出ではないかと思うのですが、雑用海図は同じ区域について同じ原版から薄紙に印刷したもので、安く買え、港湾修築用、調査研究用に非常に便利でした。雑用海図は、終戦後もまだ出しているなと思ったんですが、昭和57年にどういふわけか廃止になりました。

雑用海圖の次は(ホ)水路二関スル普通告知報告用紙類です。これは、船舶がいったん航海すると、どのような状況で航海したかということを必ず水路部にレポートしてくるんです。出航すると

き、その用紙をみんな持って行ってもらうわけですね。漁船でもどんな小さな船でもどんな大きな船でも、もちろん艦隊でもみんな持って行くわけです。それでどういうところを航海して、どういう風にしてきたかっていうような情報とか、あそこの目標はどうも、この海図じゃまずいからこういう風に変えてもらわないと困るとか、顕著な目標の書き方がまずいというような、いろいろなことを書く航海報告の用紙です。

航空図誌の細目

つぎの航空図誌は、水路図誌と全く同じような分類になっています。秘密航空圖誌の中に、(イ)機密航空圖、(ロ)機密航空書誌、(ハ)機密二属ス假製ノ航空関係圖誌、とみんな同じような名称です。報告用紙(〔二〕航空路二関スル機密告示類)も同じです。普通航空圖誌も普通水路圖誌に対応しています。

海図の区域

それからもうひとつ説明しておきたいのは、海図の区域です。海図はそうとう昔から刊行区域というのが決まっているわけです。どういう区域を対象に出すかということは、『普通水路圖誌目録』索引圖第1を見ていただくとよくわかる。ここでは第1区(東経90度~170度、赤道~北緯65度の範囲および東経170度~175度、北緯4度~20度の範囲)、第2区(東経30度~西経70度、南緯60度~北緯70度の範囲、ただし第1区およびアメ

リカ東岸・地中海以北をのぞく、第3区（第1区、第2区以外の区域）と分けて、各区ではどのくらいの縮尺まで示すとか、メートル式にするとか、やかましい規定がありまして、そういう区域ごとに海図を出してたわけです。先ほどのこの索引図第1を見ていただくと、世界中について出していたことがわかります。

秘密海図と秘密航空図

つぎに秘密海図と秘密航空図についてお話しします。『秘密水路圖誌目録』の目次の「機密海圖」の下に、「軍機海圖、軍極秘海圖及秘海圖番号索引」と書かれています。この場合、「軍機海圖」というのが一番ウエートが重く、「軍極秘海圖」というのがその次、「秘海圖」というのは取り扱いが割合に楽でした。軍機と軍極秘には海図番号のあとに小番号がついていて、どこになにが、例えば戦艦大和には何号の何番がいつているか、水路部には何号の何番がいつているか、わかるようになっていて、取り扱いが非常にやかましかったです。「秘海圖」ではそういうことはありませんでした。

航空図については、『秘密航空圖誌目録』の目次では細かく分かれておりますけれども、実際は「秘」しかなく、水路部の長い歴史で、秘密航空圖はこの3番目の「秘航空圖」しかありませんでした。あと、軍極秘の何々、軍機の何々というのは航空雑圖にもあります。先ほどちょっとお話が出ました兵要や航空気象のがそういうものに含まれていました。

秘密海図の刊行区域

『秘密水路圖誌目録』の索引図第1を見ますと、秘密海図の刊行区域がわかります。これで500版もある。日本領はもちろんですけども、ずっと南方の方から始まって、ニューギニアの方、それからアンダマン群島、モルディブ（図ではマルダイブ）群島、東の方はギルバート諸島、ハワイ諸島、択捉島なんかもありません。

国際水路局脱退と急速覆版海圖

つぎに国際水路局からの脱退の話をしてします。水路部は、同局創立当初の1921年から国際水路局に入っていたわけです。日本が国際連盟を脱退してからも、つづけて加盟していたのですが、とうとうやむを得ずに昭和15年に撤退したというか、脱退したわけです。

さきに中国の海図に関連してお話したように、加盟している頃は、各国の海図は無償でどんどん交換しなくてはならなかったんです。しかし脱退によって、そういう交換がとまり、全部の国から海図がこなくなりました。漁船だとか大きな船舶とかは、海外に買って買うこともできるかも知れないが、それも買えなくなった。もうシャットアウトされたわけです。そうすると手に入るのは、水路部にある現品というか、今まで持っているもの、確保していたもの、あとは各国公館に当時は海軍の武官がいつていましたから、そういうところからきた海図を、急速覆版しなければならなかった。世界中

のこうした海図を出さないと、航海できなくなったら大変だということで作ったのが急速覆版海圖です。これには1万台の番号が入っています。

これは表題だけ和文にしたものを貼って、あともう全部原版のままです。もし水深がはいるものなら、どんどん加えるし、もう水路部だけでは印刷できなくなって、民間の凸版印刷・大日本印刷・共同印刷でも印刷しました。こうした印刷所を示す記号が外図郭線内の右下隅に印刷してある。それがないのは、水路部の直営です。こういう海図が相当量あります。その目録はB4判で、217ページもあり、膨大な量です。まあだいたいこんなことで図誌の刊行は終戦を迎えたわけです。

水路部の製図と印刷

さて終戦を迎えるとき、あるいはそれまでに私がいろいろ経験したことをこれからお話していきます。水路部というのは昭和8年に建てられた割にモダンな建物で、最初から機密の海図を作る場所をちゃんと作ってありました。図1の庁舎及製図工場の一番左の方にある軍機室で軍機の手帳を作っていました。私も入って、こういうところがあるのかな、と思いました。部屋の中にまた部屋があり、中側はそこだけ格子で囲まれていました。

そこからずうっと抜けていくと、印刷工場があります。製版印刷というのをやってから流れ作業でいちばん終わりの印刷場にやってきて、輪転機がたくさんありました。

ここの印刷場は格子があって、印刷しているところのほか、事務をやる部屋、それから刷ったものを持ち出すときにきちんと数えなければならない、そういうことをやるような部屋が外から見えました。

それから毎週毎週水路通報というのがでて、そういうものを切って貼らなきゃならない。通報や補正図などです。機密図誌は、その取り扱いが非常にやかましくて、甲板士官というのがおりまして、そこに持っていくのは任官した人じゃないといけない。焼却場で廃棄した紙を燃やす場合も、燃え尽きるまでそばにいろいわけです。そういうことを、ずいぶん神経を使ってやらなきゃならない。そういう点は、陸地測量部も同じでしょうけど、やかましかったです。

印刷場には何回も仕事で行きました。あるとき、鉛をいれて赤表紙を作っている製本工の女の人を見ました。水路図とか水路誌じゃなくて、軍令部の兵要関係の暗号電報用の乱数表だろうと思います。海軍がそういう秘密の印刷物を作るのには、水路部以外にないからです。そういうのを私、目の当たりに何回も見ました。私は所属の第一課で、印刷は第二課ですけども、ここに入るのはなかなかやかましかったです。よく行きましたが、なにか異様な感じがしました。

時を経て、『戦艦大和の最期』という吉田満の小説(吉田, 1952)を読んだら、やっぱりそうだったなと思いました。戦艦大和や武蔵のような大きい軍艦になると艦橋は上下二階になっているんですね。上がやられたら下を使うわけです。吉田

満は、副電測士の少尉で、東京帝大出で、学徒で入ったらしいのですが、主要な地位にいたので、海図のこともずいぶん詳しく書いてあります。出撃の部分では、海図について手に取るように書いてあるのです。今お話ししたのは、この小説の「最終処置」という小章題のところで、ちょっと読みます。

暗号士ヨリ暗号書ノ処置終了ヲ伝声管ニテ届ク 自ラノ腕ニ軍機書類一切ヲ抱キ、艦橋暗号室ニ入りテ内ヨリコレヲ閉ゼセリ、ト
敵ノ入手防止ニハ完璧ヲ期セル暗号書 鉛板ヲ表紙ニ打ッテ沈降ニ万全ヲ期シ、更ニ潮水ニアエバトケ去ル特殊「インク」ヲ以テ印刷シ、且活字ノ跡ヲ消ス為文字ト異ル紙型ヲ二重ニ強ク刻印セリ シカモ暗号士、身ヲ以テ機密ヲ保持セザルベカラズ

私の周りに毎日毎日そういうことをやっていた人がたくさんいた。文字を裏側にしてやっていたのはそれだな、という風に思いました。

水路部の空襲

昭和20年3月10日の空襲で、水路部は大きな被害を受けました。昨日の渡辺正さん（当時参謀本部）の話じゃないけど、水路部でも当時は交通機関が不通になっても出勤せよというので、私も何回か歩いて通いました。3月10日の時には、たしか歩かないで済み、交通機関が動いていたと思います。方々がひどい状態になっているので、どうかなと思って行きました。水路部は本庁舎が焼けてません

から、ああいいな、と思って入って行ったら、製版印刷の方がどうもただごとじゃないんですね。焼夷弾で全部やられて。

ただし測量原図とか経緯度成果表とか大事なものが全部入っていた、後ろの方の原版庫には焼夷弾が落ちませんでした。これで測量原図が助かったのは、あとの水路業務遂行のためにどのくらい役に立ったかわかりません。

当時の記録としては、原版庫が無事で、測量原図がOK、しかし図誌の倉庫が焼けました。図誌倉庫というのは、物品検査場および倉庫です。ここに全部刷り上がった海図が入っていたわけです。ここが、3月10日に撃ち抜かれたから、海図が焼ける、航空図が焼ける、水路誌が焼ける、大変だったわけです。それを、毎日毎日整理するのですが、風で魚河岸の方から銀座通りの方にどんどん飛んでくわけです。魚河岸の方から。軍人は飛ばさないようにしろっていうけど、飛ばさないようにすることができません。これは、あ～と思って空を仰ぐよりしかたがない。そういうような毎日でした。今でも思い出します。機密の図類が全部やけ飛びまして、非常に大変だったわけです。

終戦と水路部の移管

昭和20年3月10日の空襲の後は、焼けあと処理やなんかをやっていて、まあそれでもってとうとう終戦になったわけです。私はこの終戦の時にちょうど、水路部修技所特修科²⁾にいて練馬の方に疎開していました。水路部は方々に疎開してまして、修技所は練馬の開進第一国民

学校校舎に全部疎開してたわけです。そこに通っていました。学生が5人いて、それらが移管の手伝いをやったわけです。直接私は見てませんが、『日本水路史』(海上保安庁水路部編, 1971)の224~227頁の終戦に関する記述資料の中に、どういふことから移管になったというようなこと、それから終戦になってどういふものを提出しなければならなかったということが書いてあります。

まず昨日の陸地測量部から地理調査所への移管のお話のように、水路部が残ったというのは、『日本水路史』に書いてありますように、沿岸海上交通の不安を一掃するための水路測量の必要性というのが第一の理由です。『日本水路史』の300頁掲載の「連合軍最高司令部(GHQ)一般命令第1号」(昭和20年9月2日)の(口)に「航海ヲ便タラシメル一切ノ施設ハ直ニコレヲ復活ス」とあります。これを受けて水路部はずっと仕事を続けていけということで、素直に残ることができたわけです。これにくわえて、昭和20年12月26日付のGHQからの覚書には「水路部は下記制限内において平時の一般業務を遂行する」とあり、そのあとに「今後すべての水路部刊行物は制約を受けない」とあって、どんなものも出してもいいということになったわけです。

この覚え書きには、さらに「他国調製に属する秘密海図を覆版しない」とあるほか「日本海図にアメリカ海軍水路部制定の図式を採用し、おもな表題および水路記事に英訳を付ける」とあって、アメリカの図式を使うようにしました。しかし、アメリカの図式については、翌年4

月17日の覚え書きで取り下げられたので助かったわけです。

なお9月2日の覚書には、さらに「なお水深は従来どおりメートルで表示して差し支えない」とあります。アメリカでは今でも海図はメートル式ではない。世界の全部の国でメートル式になってないわけです。国際水路局に入って、そのリコメンデーションによりながら、メートル式になっていない国があり、そのなかには大国もあるんです。英国がやっとやっとそうなったくらいで、アメリカはまだなっていない。そろそろなるころだと思います。

9月2日の覚書には、その次に「日本水域における必要な測量は当司令部の許可を要す」とGHQの許可がいるとしている。これは占領当時当たり前ですね。さらにそのつぎに、「日本水路部が毎週発行する水路告示は、その都度英文版200部を連合軍最高司令官あてに提出を要す」とあります。これは水路通報です。すでにお話ししましたように、海図と水路誌と水路通報というのは切っても切れないもので、水路通報がないと、向こうでも困るからでしょうね。そういうようなことから、向こうからいろいろ監督する軍人が来るようになったわけです。

国有財産資料の引き渡し

終戦の処理の中で、国有財産資料のアメリカ軍への引き渡しについては、『日本水路史』の224頁に記載があります。当時はどこの役所もそうですけど、武官の軍人と文官の高等官が一緒になって分担

して任務についていたわけです。それで幹部がメインになって、9月4日から11月8日までかかって出したわけですね。図面として提出したのは普通海図はもちろん、秘密の軍機・軍極秘・秘の海図全部。秘の航空図、その他の秘の機密航空図、そういったもの全部。それから秘の水路誌、秘の航空通報、秘の水路通報。

あとは原図の方です。測量原図を全部提出しなきゃならなくなっただけでも、日本側でもこれからの仕事があり、戦後の日本領の区域は原図がないと困るから、持っていこうとはしませんでした。そのかわり、そのものと同じものを2枚、できあがりきれいにしろというような注文で、当時は、まだゼロックスもありませんで、毎日青焼きをつくって水洗いしたのを輪郭で切って乾かしたりしてるのを目の当たりに見たのを覚えています。

提出しなければいけなかった測量原図は、日本領でなくなったところですね、千島、樺太、奄美大島、小笠原、それから沖縄の大半。そういう測量原図は、経緯度成果表とともに、全部の英文のリストを作って提出しました。その後、奄美大島とか小笠原、それから沖縄の返還のときには、測量原図は一括関係書類と一緒にきちんとしてひとつも痛まないでちゃんと返してくれました。これはまあ大したもんだと思いました。

アメリカ海軍水路部への留学

時を経まして1961年頃、私は1年間アメリカの海軍水路部に留学しました。そのとき、全部で10人、外国人が教育を

受けました。最初の頃に見学があり、チャートライブラリーという海図の図書館に行きました。素晴らしい部屋で、もてる国はこんなにスペースもあるのだなと思ってびっくりしたわけです。そこに日本で接收された軍機図がありました。南洋群島とか、日本のも全部あるのです。全部出てきました。日本のように、地図ケースにうんと詰めてないから、楽々出てきて、日本でももう少し何とかならないのかなと思いましたね。地図に対する考え方が、日本は本当にお粗末でしたね。

アメリカ海軍の水路部は、今は国防省画像地図庁というかたちで陸の地図と一緒になっていますけども、それでも同じように、きちんとなっていると思います。おそらく陸の地図の方もきちんとなっていると思いますね。

アメリカでは、図面に対する愛着というか、丁寧さがあって、日本の海図は良く出来ているとインストラクターが説明したときには、私もまだ、英語がなれないのに、その日ばかりはちょっといい思いをしました。他の国は東南アジア系の人が多いから、自分の国で出しているのは英国版海図が多いんですね、インドとかパキスタンとかそういうところからきていました。そういう国は、おそらく英国の海図でしょうね。当時としては何千版という日本の海図が向こうに行ってたんです。

部屋なんかも蛍光灯で、ちゃんと一人か二人いましてね、鍵を開けて入ったときに人がいるんじゃない、いいコンディションで保存されているんです。

拿捕海図の調査

それからもうひとつ、昭和 17 年に神戸に出張に行ってくれということで、大友という海軍大尉と、村井という技手と、それからいちばん若い私が下っ端で、3 人で行きました。はじめは何しに行くのかさっぱりわからなかったのですが、山下汽船がシンガポールで海図を拿捕してきて、その調査を全部やってくれということです。使えるものあるかどうか、掘り出し物があるかどうか、それを水路部の目録と対照して全部検査するわけです。山下汽船の人から連絡があって、英国の海図だということがわかったから、英国関連の目録を持っていきました。

倉庫に入っていったらすごい夏の暑さで、何日もこんなところでやるのかと思いました。一枚一枚海図を目録で当てるのですよ。いくつか掘り出し物があり、その中で一番は、英国の秘密海図のインデックスで、これは赤色です。(参加者からの「鉛は入っていなかったのですか?」という質問に対し)鉛は入っていませんでした。英国の海図は、すこしハードカバーでしたけどね。

その仕事がお開きになって、姫路に私の親戚がいたので、寄ってちょっと羽のばして帰ろうと思ったのです。ところが坂戸、これを持っていけっというんですね。これは命より大事な大変なものだと大友という大尉がいうんですね。そんな思い出があります。そういう拿捕したものが、何図か覆版海図になっているわけです。

今後の研究にむけて

そろそろ終わりにしますが、外邦図と海図・航空図の関係について私の思っていることを話させていただきます。普通海圖と急速覆版海圖、これは外邦図をお調べになるときに是非使っていただいたらいいと思いますね。昨日ちょっと東北大学の渡辺さんから、東北大学の外邦図目録(東北大学大学院理学研究科地理学教室, 2003)を見せていただきました。素晴らしいインデックスで、日本のだけではなくて外国の地図・海図も大学のような機関でやっていっていただかないと、だんだん捨てられていくようになるんじゃないかと思います。急速覆版海圖だっけいつかは処分されるでしょう。

急速覆版海圖はありとあらゆるところの海図を出していますからね。しかも写真覆版で、調査をするときに非常にいいですね、書き直しているのじゃないですから。英国海図が主で、フランスのを覆版したのもあります。『急速覆版海圖目録』を見ると、どこの国の海図を覆版したかってちゃんと書いてあります。沿岸航海用海図にも沿岸目標や地名やなんか書いてあるんですね。インドの英国海図で素晴らしいのがありますから、一度見ていただければと思います。

あとは秘密の海図ですね、今日お配りしましたので、どういうところについて出ているのかはお分かりになったと思います。それから秘密の雑圖と書いてあるところに、海象気象圖というのがありません。これは見逃しがちですが、たくさんあります。外邦図の資料として海図も系

統的に使っていただくことが大事だと思います。

あと、航空図は意外と役に立つかもしれません。向こうに展示しているのは海南島の航空図です。航空図は外邦図の兵要地誌関係を調べる資料になるのではないかと思うのです。どうしてかといいますと、航空図にあらわれる陸部の資料は水路部にはありませんから。当時の参謀本部の陸地測量部から取り寄せるとか、海軍の駐在武官から何とかして資料を手に入れて、しかも色刷で作ったということは素晴らしい内容です。

航空図は、地図の投影の話になりますが、基準緯度を最初に計算しなければならないのです。全部メルカトル図法ですから。日本の付近は緯度 35 度で当たり前なのですけれど、航空図は世界中緯度 35 度でやっているんです。図の接合が自在で飛んでいけるぞという、大きな漸長図法というか、メルカトル図法を想定していました。

それからもうひとつ、航空図では地名が全部カタカナです。なんでそうなったかということ、海図は、ほとんどが昔の商船学校を出た人やあるいは兵学校を出た人が使いますから、英語で大丈夫です。航空図の場合は、軍用機に一人で乗ることもある。また地名が横文字で読みにくいということで、最初から全部カタカナです。そのカタカナの地名調査がなかなか大変で、膨大な仕事量でした。

海軍航空図の製作には地名の係員が 20 名ばかりいましたけど、そういう人たちだけでは足りないのです。当時の文理大の地理科の学生が 20 名、東京の女子大の

英文科の学生が 80 名、やはり戦争ということで動員できたんでしょうね。それで、東大の辻村(太郎)さんとか長谷部さん、外国語学校の朝倉さん、文理大の田中(啓爾)さん、内田(寛一)といった教授が水路部の囑託となって、カタカナの地名をちゃんとルールを作って決めた。1 地名 1 カードで作業した。大変な仕事でしたので、地名調査のことは忘れないでいてもらいたいです。

秘密水路誌

水路部の資料として、これ以外に、海図に対応する赤表紙の秘密水路誌があります。水路誌は 1 巻から 4 巻、日本中と外国地域が相当詳しく出ているわけです。第 1 巻が本州、南方諸島、内海、北海道、樺太南部、第 2 巻が九州、南西諸島、台湾、朝鮮、黄海北濱、第 3 巻が南洋群島、マリアナ諸島、カロリン諸島、マーシャル諸島。南洋群島は日本の生命線でした。第 4 巻は、シベリア沿岸、満州国沿岸、支那沿岸、東沙島沿岸です。

先ほどお話しした測量原図の提出の時には、南洋群島の測量原図は全部提出しました。南洋群島は日本領だったわけですから、大変な量の測量原図がありました。日本本土から三角測量が届きませんので、あそこだけのちゃんとした三角測量がありました。

海陸兵要圖

最後に、海陸兵要圖があります。水路部は、今の建物に建て替えるときに、第

二大蔵ビルという、有楽町の方に一回引っ越したんです。引っ越しするときに既にもう、海陸兵要圖関係資料が処分されました。それから向こうから帰ってくる時にもまた処分されてしまいました。本当はできあがってから全部ゆっくり処分すればいいのに。

国土地理院が移転するときには、五条さんという方を知っていたので、「五条さん、不要な図は移転後に処分すればいいんですよ」と言いました。だから地理院ではちゃんとなっていると思います。そういうことで、水路部には海陸兵要圖もあったんですよ。

海陸兵要圖というのは、水路部軍極秘・水路部軍機、軍令部軍極秘・軍令部軍機、軍令部秘というのが肩書きのチャートなんです。保存しておかなきゃいけなかったんですね。おそらくアメリカには接收されたのではないかと思います。それがわかっていけば、私、1961～62年に行ったときに、見せてくれと言ったら、おそらく見せてくれたと思います。海陸兵要圖は、水路部よりも地理院の方がきちんとしているんじゃないかと思いますね。水路部と連絡して、所在の方を調べて、どこかできちんと管理して、目録を作っていたかどうかというのが大事だと思います。

今日は私が水路部にいました当時、今まで表に出してない海図などをお見せして、皆さんこういうものがあるということを知っておいていただいて、じゃあこれのどこが見たいというのはまた次の段階とさせていただきます。今回はまず概要だけを整理いたしました。

質疑応答

[編集者の注]

以下の質疑応答の記録については、とくに質問の場合、録音状態がわるく、十分にテープ起こしができなかったところがすくなくない。以下では、したがって主として坂戸氏の談話を収録した。なお、京都大学文学研究科地理学教室蔵の地図・海図については、本ニューズレターの「はしがき」(石原潤「外邦図のこと」)ならびに山村報告を参照していただきたい。

Q.海陸兵要圖について、作られた範囲、大まかな縮尺、何を目的としていたかなど、もう少し詳しく教えてください。

A.私の頭の中にあるのをお話しするのならいいのですが。縮尺もある程度まできちんと決まっていたし、刊行範囲も決めてやっていたんでしょう。国土地理院の方は陸海編合圖とっていたんですよ。水路部の方は海陸兵要圖で、水路部にいけば、資料があると思います。

(中略)

わかりましたらまた連絡をとるようにします。

(中略)

私はどこにどういう資料があるという所在目録があって、そこに海図が入っていればいいと思います。どこかでちゃんとした海図をふくめた目録を作っていたきたい。水路部自身もなかなか場所がないので、とっておくのは難しいそうです。

私も OB としてどうしてなのかなと思うんですけど、水路部も多目的になって、海図を中心とした仕事の他にもやらなきゃいけないことが多いから、なかなか大変らしいですね。

Q. 航空図にカタカナ地名を入れるときに、いろいろな地理学関係者を雇ったわけですね。

A. 私の記憶では、東大の辻村さん、長谷部さん、外国語学校の朝倉さん、文理大の田中さん、内田さんです。

Q. 長谷部さんは地理の人ですか？

A. 私もわかりません

Q. 名簿かなんかは残っているのですか？

A. 残っていると思います。後もうひとつ、戦争がだんだんひどくなるときに、陸の方も、海の方も、なるべく日本の地名をつけようっていうことがあったわけですね。海軍は海軍で日本の地名をつけようと思って、陸の方と連絡を取るようなことをやっていた記憶があるんです。例えば、マリアナ諸島の「マリ」は毬などです。そういうちょっと特別おもしろい地名、そういうのを学会で取り上げたらどうかと思いますね。もう少しソフトな話も聞けるんじゃないかと思うんですね。

Q. シンガポールで接収した英国の秘密図のリストのその後は？

A. その後は、私もその担当じゃなかったものですから。おそらく終戦までは大事にとっておいたでしょうね。終戦の時に隠しておいたらよかったでしょうけど、おそらく処理しちゃったんでしょうね。アメリカのは拿捕しようと思ったらでき

たでしょうけど、英国のはなかなか手に入らなかったと思うんですね。ちゃんとリストをアップデートするために、日本の図誌目録と同じように手書きでみんな書いてあってですね。

Q. この話はどこかにもうお書きになったのですか。

A. 今日話した内容はどこにも話してないんですよ。だからこの資料もあんまり出席した人の手元にだけ置いておいていただいて、これを次の会議の時にもう少し補うようにしていくとよいと思います。

(とくに京都大学所蔵の明治 40 年代～大正期の海図をめぐって)

役所では、大学とかアメリカの水路部のように、丁寧に地図・海図を扱うということがないように思います。大学できちんと保存して、当時の図誌目録とすぐわかるようにしておいていただければいいと思うんです。また当時は、日本の海図は航海専門の主題図とはいいながら、基本図にも使えるような内容に編集してあります。陸を全部省略しろという時代ではないですから。京都大学に保存されているような海図は、大事に保存していただきたい。

<今井氏の補足> 水路部には、明治 20 年代のものから現在まで海図がそろっていますが、残念ながら水路通報によってアップデートされて訂正されています。ですから初刷りのものはあまりない。京都大学にあるのは修正されていないので、海岸線などについて、貴重な資料になると思います。旧版海図は内湾の環境問題

の研究に良く使われています。旧海岸線が埋め立てや防波堤がない状態でどのように湾内の海水が流れたのか、ということシミュレーションによって知ることができます。京大が持っている海図は貴重なので大事に管理していただきたい。(中略)

海図だけではなくて、水路誌も大事です。軍機の水路誌で、相当使える記事がたくさんあるんですね。それは倉庫に埋もれてしまうのはもったいないと思うんですね。例えば、この前水路部で講演したときにも話したのですが、横須賀軍港に戦艦大和とか、武蔵だとか、ああいう超大型艦が入るのに、錨かけをします。海図には錨は描いてありますが、どういう風に錨をかけたらいいかという図面が、水路誌にはちゃんと大きく、こういうふうにとるっていう角度までみな書いてあるんです。また例えば、当時の徳山の燃料廠で、どういうふうに着岸するか、大型艦はどういうふうにつけたらいいか、ということがよく書いてあります。当時はそういうことをするのが当たり前だったのです。

次回には、水路誌のそういうものもできる限りお見せできればと思います。海図だけじゃなく水路誌も。

注

- 1) 坂戸直輝(2002)を参照。
- 2) 技師または修技所高等科卒以上に指定事項を専攻させる(海上保安庁水路部編, 1971, 216)。

文献

- 海上保安庁水路部編(1971)『日本水路史』(財)日本水路協会.
- 坂戸直輝(2002)「海図に関する昭和の技術小史: 水路部とともに歩んだ60年」*地図*, 40(2): 2-20, (4): 22-39.
- 東北大学大学院理学研究科地理学教室(2003)『東北大学所蔵外邦図目録』同教室.
- 吉田満(1952)『戦艦大和の最期』創元社.

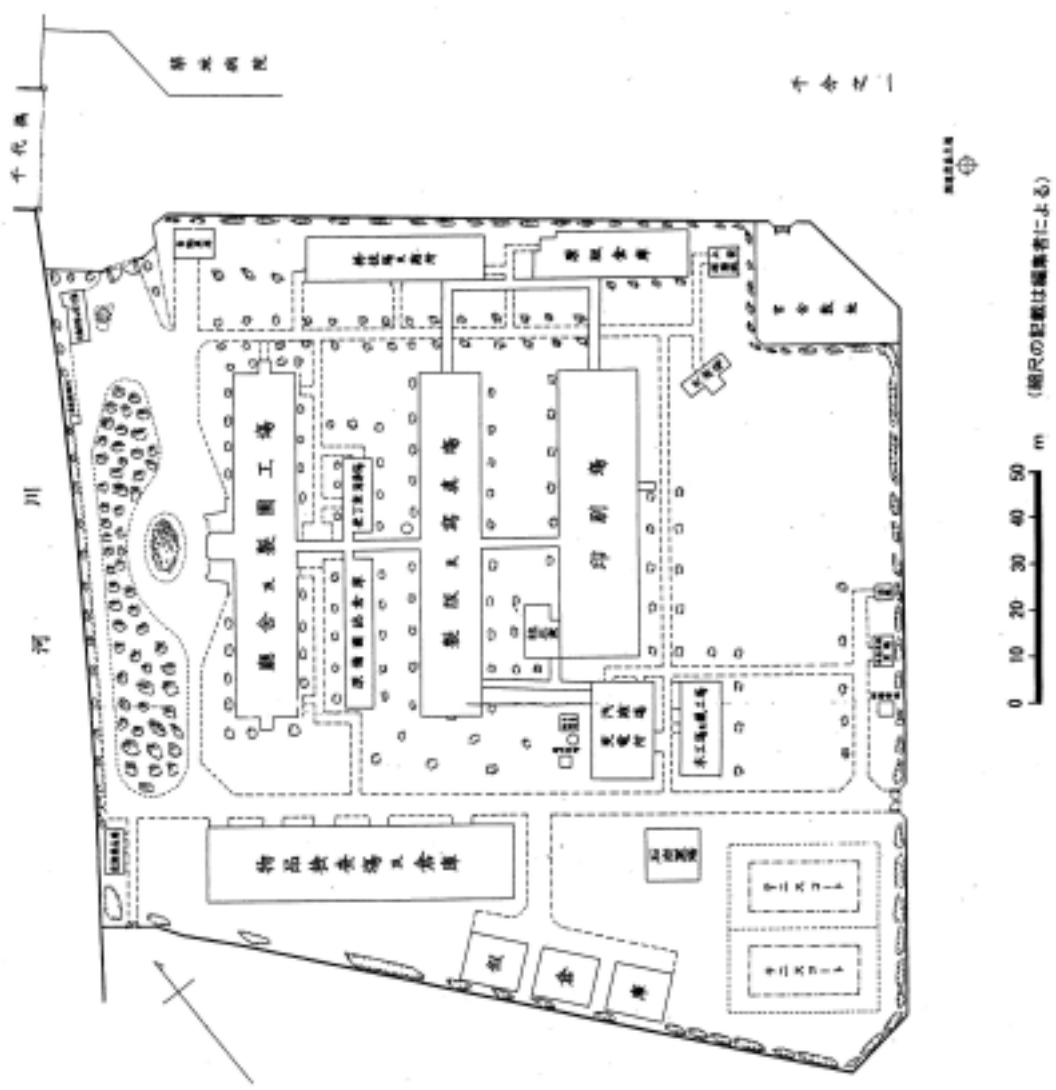
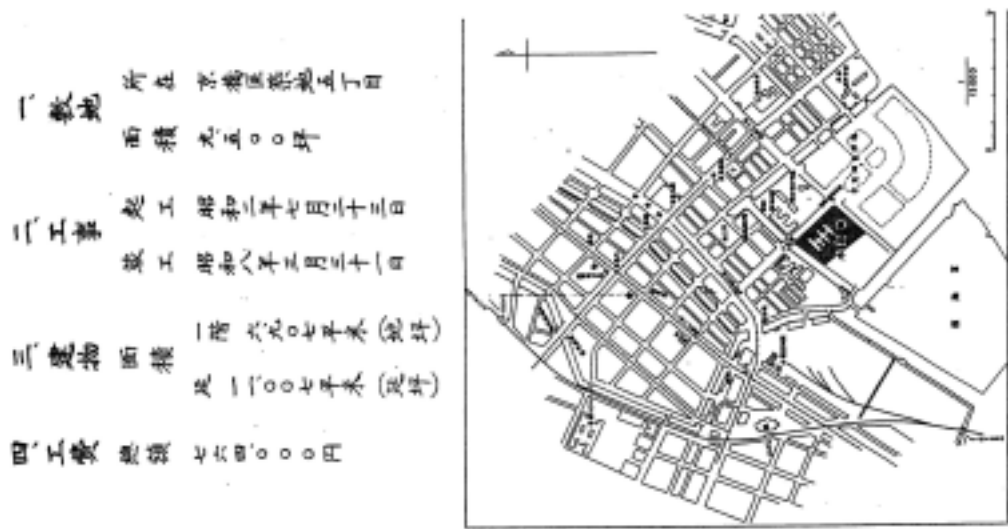


図1 旧水路部の位置